



フクちゃん随筆

横山 隆一

隆一





フクちゃん随筆

NDC 914 19.4cm

定価 四二〇円

昭和42年11月4日

第1刷発行

著者

横山隆一
よこやま たけふち

発行者

野間省一
のま しょういち

発行所

株式講談社
かぶしきこうだんしゃ

東京都文京区音羽 二丁目三十二番地
電話 東京 六四二二二（大代表）
振替口座 東京 三九三〇

印刷所

信毎書籍印刷株式会社
しんまいしょくしやくしん刷くわしや

製本所

株式会社若林製本工場
かぶしきしゃわかしんせいほんくわう

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

フクちゃん随筆・目次

I
ひとりがてん……………7

てぶらの鬼 9

猿山 11

へちこ 13

竹談義 15

投書じょうず 18

安物買い 21

春の会 23

動画残酷伝 26

パカ・ヨウムシ 28

伊豆の青カラス 32

わがボロチーム 35

蘭丸 38

古都の記者 41

小泉信吉大尉 43

珍断層 46

いじわるノート	48
格言	52
腹中の騒ぎ	56
赤いかばんの男	58
尻型	62
竹馬と輪回し	64
恐ろしい郷愁	67
野放し	69
パンザイ事件	71
非常口	74
散らかし	76
定期移動	79
ねどこ	82
お気楽	85
沸き口のつらさ	87
ままごと	90
あこの怪	92
ハエ生まれる	97
くらべる	99

Ⅱ 漫画友談

.....129

修業僧 101

日曜屋 103

手輕な風流 106

利用 111

勝手きままな植物群 113

ふうりん 118

国産第一号車 120

生命力 123

ひとまとめ 125

漫画集団を作ったところ 131

酒と酒飲みたちのお話 142

風変わりな人々の思い出 153

ジャワ島・珍妙従軍記 163

文学史に残る「新夕刊」 173

戦争で別れた友人たち 183

クドボン組々のめんめん 193

Ⅲ 漫画集団世界を回れば……………257

高位高官から乞食まで 204

私のメモに残る人々 214

文士劇に登場の名優たち 224

鎌倉カーニバルと紙吹雪 234

カーニバルと真っ赤な恐竜 244

つけたし 254

ハワイ——まだ日本の舌 259

ロサンゼルス——なつかしい顔、顔 261

ニューヨーク——私はひげをのばすことにした 263

モントリオール——最低のがっかり 270

ロンドン——モッズの本拠とオールド・パアの墓 272

パリ——金色の美女が「見タネ」 276

マドリッド——闘牛と酒場 277

イタリア——泥棒とカミナリ族と勉強家の大学生 280

ハンブルグ——夜の歓楽街 283

あとがき 285

装丁・稲垣 行一 郎
本文カット・著 者

I
ひとり
がてん





てぶらの鬼

マメな人に用件をたのむと、少々面倒なことでも、すらすらとうまく運ぶので感心することが多い。気をつけて、まわりを見回すと、いろいろな種類のマメな人がいる。なおよく見ると、マメだらけで、人の上にたつような人はたいていマメな人である。

極端にいい方をすれば、現代日本をささえてる人は、マメ人種であるといえる。学生運動の幹部もマメなら、組合のリーダーもマメな人たちである。

マメと間違えやすいのは、やじ馬である。私も、自分はマメだと思っていたが、よく考えてみるとマメによく似たやじ馬であった。家の者は私にならってやじ馬である。女房もやじ馬だが、子供もそろってやじ馬である。

マメというのは性分で、やじ馬というのも性分だから、間違いやすい。

昔、たいへんマメな子に出会って感心したが、二十年ぶりに会ったら、同じようなマメな青年になっていた。やはり性分である。

知人でも偉いと思った人は、たいていマメである。いまいる人を書くとおべっかをつかっているようだからやめるが、故人ならいいだろう。電通の鬼といわれた吉田秀雄さんも、マメな人であった。道路公団の岸道三さんもマメ人だ。

そこで考えると、マメというのは一種の鬼のごとき性格で、才能は金棒のようなものである。鬼も金棒があつてこそにらみがきいて、出世もしよう。

ところが、マメなくせに才能のない人がいる。てぶらの鬼である。てぶらの鬼は、なまけ者の持っている金棒をつかうことが多い。だから、てぶらでも鬼は、いつかは金棒を拾うのである。政治家にはてぶらの鬼が多いなどといつてはいけない。

やじ馬にも才能はある。やじ馬のそれは金棒ではなくて、うちわである。うちわで、あおぎたてて笑うのがやじ馬で、貧乏神に似ている。

若いころはマメな性分が衝動になつて、いろいろな方面にはけ口を求める。自分の才能に気がつかないから、やたらに動きまわる。スポーツに走ったり、恋愛に走ったり、学生運動に飛びこんだりする。私は、そのころでも、すっかりうちわをもった見物人だった。

年をとると、それぞれ自分の金棒に気がついて鬼になる。左翼から転向した人は、たいてい金棒をさげて、せっせと仕事の鬼になつてゐる。才能がありすぎて金棒ひきになつてゐる人もある。

マメな人ばかりで世の中ができあがると、忙しいばかりである。近ごろ、世の中が、こんなに騒々しいのはマメな人のせいだ。やじ馬ばかりだと世の中はもう少し静かである。

とんだ、ひとりがてんになった。



猿

山

だ感がある。

動物園の猿山だって、老猿が威張っている。これが自然の法則だろう。どうして若者のごきげんを取らなければならないのだろう。老人は威張るべきである。

しかし、年とって威張るには、若い者がかわいがっておかなければならない。ところが、戦争や食糧不足で頭のよい若者の不作が続いたから、できの悪い若者がかわいがった。だから、老人たちは猿山から追われて、しょんぼりしている。

それでも私たちのまわりには、まだ威張った人たちが健在でたのしいが、日本の人口からいうとたいへん少ない。ある集まりで、七十歳のAさんが私をつかまえて「わしらのような年寄りのはのう」と話しかけて来たら、近くのテーブルから「こら、若僧のくせに年寄りぶるな」としか

る声がした。見ると、そのテーブルは八十歳以上の人たちの集まりであった。老人は頭をかくて「いつまでも威張りやがって」といった。これこそ私の好きな猿山現象である。

そんなわけで、私は自分をいつまでも小僧と思い、そのうち大僧になったら威張ってやろうと思っている。ところが、世の中はうまくいかないもので、まわりの友人たちがそろそろじじむさくになってきた。玉川一郎が孫に「おじいちゃん」といわれて、涙がどつとあふれ出た話や、孫の写真をバーのホステスに見せ歩く人や、孫をだいてテレビに出たりするので、なんという変わり方だとなげいていたところへ、私も初孫をさずかった。

子だくさんの私の家で、孫の一人や二人ふえたところで同じようなものだと思っていたら、自分のまわりの空気がしだいに違ってきた。

孫台風というのだろう、いままでの生活がいつの間にか孫にひっかき回されているのに気がついた。そして今日は、東京の嫁の家にいる孫との初対面である。

つぶさに見た。たしかに、この顔は家に伝わる顔である。他人が見てもわからないが、この赤ん坊の鼻の曲線は印鑑証明よりたしかだ。

たとえば、ダグラスという飛行機会社の作る飛行機は、型がどんどん変わっている。しかし、あの機首のはなすじのカーブは、ダグラス機の伝統みたいなくせをもっている。ボーイングでもそうだ。あれは飛行機の人相で、はなすじのカーブは、ボーイングの血すじである。

家の孫も、わが家に伝わる機首をふりふりむずかった。

見ているうち、自分に不思議な変化がおこっていた。だらしない顔になって笑っている自分に気がついた。

こうなつては、私はもはや威張るよりほかに道はない。外ではから威張りになるので、家で威張ることにした。



へ
ち
こ

昔、泉州堺の茶人でへちかんという人がいた。ノ観と書いてへちかん」と読むのである。

たいへん奇人で、人々から好かれた大人物だったらしい。馬をかわいがり、馬が死んだら、その皮で袋を作り、首からかけ、生きている馬にいうように話しかけたりして、袋とともに一生を終えた。

へちかんの名は、遠国まで聞こえた。私の生まれた土佐でも、へちかんの名から、へちこというこばになって現在まで残っている。

へちこというのは、間違つたというような意味もあるし、めっちゃだというような場合もつか

う。「どうだい試験は」「へちこじゃ」というような会話をする。道を間違えたりすると「しもうた(しまった)へちぜよ(へちでした)」と使う。

さて、変わり者は世にうようよいあるが、スケールの大きな変わり者は尊い。坂本龍馬も有名な変わり者で、女の着物は着るし、現在のハンドバッグのようなバッグを持ち歩くと、ふところには洋書をきざに半分出して入れるような人物だった。ある雨の日に川で泳いでいるのを、人が笑ったら、ぬれるのは同じだといったという。

私が子供のころ、龍馬ファンが集まって、雨の日に龍馬の泳いだ場所で泳いだことがあった。鏡川というきれいな川で、赤石とよばれたあたりは、川岸に赤石が突き出していた。そのあたりは、浅くて子供の背も立つようなところである。龍馬先生ともあろう大人物が、こんなけちなところで泳いだのかと、ふに落ちないことがあった。そして変わり者だったということ、なっとくした。

画家の横山大観先生も、相当な変わり者だった。Tさんという美術記者が、大観の仕事部屋へのこのこはいって行くと、先生は大作の最中で、すっぱだかで画の上に四つんばいになり、ハンカチに水をふくませ、画をこすって、ぼかしをやっていたそう。先生の有名な雲煙術も、こんなかつこうだと思つと、つい笑ってしまった。Tさんはいった。そして大観先生はぶきつちよで、ときどき描き損じるので、人を画室に入れないそう。

また大観先生は、とてもこわがりで、夜になると泥棒の心配ばかりしていたという。夜中の戸